

39番目の物語

——ウィリアム・ペインター『悦楽の宮殿』より——（試訳及び語義表）

羽 多 野 正 美

サレルノのタンクレディ侯爵は娘の恋人に刺客を送り、殺した恋人の心臓を黄金のカップに入れて娘に送ります。娘は毒水を入れたカップにその心臓をいれ、飲んで死にます。

（大学のあるイタリアの小国）サレルノ¹⁾のタンクレディ侯爵は礼儀正しい、温和な領主様でした。でも、そんな侯爵様が年甲斐もなく娘の血で手を汚すという、とんでもない暴挙に出してしまわれたのです。侯爵様には生涯娘一人が授かっただけでしたが、その娘も授からなかった方がもっと幸せな人生であったにちがいません。

父親が我が子を可愛がるのは当たり前ですが、侯爵様も娘を凄く可愛がっていました。侯爵様は娘をあまりにも強く愛していましたので、娘が自分の目の届かない所にいることすら耐えられないことでした。そのため、娘が適齢期をとうの昔に過ぎていたというのに、侯爵様には娘を嫁にやるという気持がぜんぜんありませんでした。そんな侯爵様でしたが、ついにカプア²⁾侯の息子の一人に娘を差し出したのでした。しかし、二人の仲は長く続かず、娘は未亡人となって父親の所に戻ってきたのです。

彼女は誰にもまして体つきの良い、顔の整った、たいへん美しい女性でした。瑞々しい感じの快活な女性であったばかりか、女性に期待される以上に聡明な女性でした。

そんな彼女は愛する父親と生活を共にしながら、貴婦人に相応しい毎日を愉快に送っていました。一方、父親は娘をあまりにも強く愛していましたので娘の再婚を考えるとどこか、気にもかけませんでした。彼女はそのような父親に再婚を願

い出ても仕方がないことだと思いつつも、何とかして勇敢な男を密かに愛人にしたいと思っていました。

（宮殿ではごく普通に見られることですが）立派な紳士を初め、多くの男が宮殿に出入りしていました。それで、彼女はそこに出入りする男たちを言動や身分に注意しながら観察していました。（その中に）父親の召使いの一人で彼女に好意を寄せる若者がいました。それはジスカルドという名の者で、（徳目や志の気高さという点で他の誰よりも優れた者でしたが）実に卑しい生まれの者でした。しかし、彼女は彼の姿が目にはいと凄く喜びを感じ、他の誰にもまして彼の行いを褒めそやしました。

その若者は彼女が自分に寄せる熱烈な愛を感じとって、身分をわきまえずただただ彼女を愛しようと心に決めたのです。このように二人は互いを意識し、心の中で想いを募らせていました。特に、彼女の方が彼と話す機会を持ちたいと強く思っていました。ある日、彼女は誰にも知られずに自分の気持ちを伝える何か良い思案はないものかと考えました。

思案に暮れたその翌日彼女は手紙を書き、自分の想いやどうすれば自分の許へ話^{もと}しに来られるかをしたためました。その手紙を葦の茎に入れ、「今夜あなたの召使いに火を起こしてもらえよう、ふいごを用意して下さいな」と、剽軽な物言いでジスカルドに手渡しました。ジスカルドは葦の茎を受け取りながら何か特別のことがない限り彼女はそのようなことをする筈がないと思い、自分の部屋へ戻ってその茎を調べていると、それには空洞があることに気づきました。開けてみる

と、そこには彼女が書いた手紙が入っていました。彼はその手紙をじっくりと読んでその趣旨を理解したとき、自分はこの世でもっとも幸せな男だと思ふとともに、指示どおりの方法と手段で彼女に会いに行く準備を始めました。

王宮の一隅に丘があり、その斜面に洞窟がありました。それは昔掘られた抜け穴でした。その抜け穴の途中に自然に出来た通気口があって、そこから光が差し込んでいました。その抜け道は、行き来する人もなく、長く使われていませんでした。そのため、通気口の出口の辺りには灌木やとげのある植物が生い茂っていました。

洞窟には階段があって、彼女が寝起きする宮殿の一番下の部屋の一つにつながっていました。その部屋はずいぶん長い間使われていませんでした。しかも、すごく頑丈な扉が閉まっていたから、その部屋のことを記憶している者は誰一人いませんでした。

しかし、恋の力が（その目にかかれば、秘密になるものは何もなくすべてが記憶に蘇るものなのです！）この抜け道のことを、多情なこの女性の記憶に甦らせたのです。

彼女は何日も知恵を絞ってその扉の開け方（知っている者はいないと思われました）を考えました。やっとその方法を思いついた彼女は独りで洞窟の中へ下りて行きました。ジスカルドに下りてくるよう命じておいた通気口を見つけるや、彼女は地上からどのくらいの深さであるかを調べて彼に伝えました。それを実行に移すためにジスカルドは上がり下りができるように結び玉や足がかりをつけたロープを用意しました。そして夕方になると、茨や灌木から身を護るために皮の上着をはおって、誰にも気づかれることなく例の通気口の所へ行きました。そして、入口に生えていた木の幹にロープの一方をしっかりと結わえると、彼は洞穴の中へと滑り下り、そこで彼女が来るのを待ちました。

彼女は夕食後、ベッドに行くふりをして侍女を部屋から遠ざけるや、ドアをしっかりと閉め、独り洞穴の中へ入って行きました。そこではジスカルドが待っていました。二人はこの上なく悦び合

い、すぐに彼女の部屋へ上って行きました。二人は夕べの大半をその部屋で過ごし、又とない飲びを味わい合ったのです。

ジスカルドはその後の恋路の手筈をしっかりと打ち合わせ、それを密かに実行するよう指示すると、一人洞穴に戻りました。彼女も扉を閉め、侍女たちの所へ戻りました。

ジスカルドは夜の帷とぼりが下りるのを待って、降りるときに使ったロープで通気口から外に出て自分の部屋へ戻りました。このようにして、逢瀬の方法がわかったので、その後彼はたびたび彼女の部屋へ行きました。

しかし、運命の女神様は二人の楽しみを妬まれて「成功の悲嘆」という報酬をお与えになり、この二人の恋人をじっくりと苦しめながら、深く悲しい結末へと導かれたのです。

領主様は娘の部屋へ独りで出かけられてはそこにしばらく留まって娘と話をして帰られるということがよくありました。ある日の夕食後も、領主様は娘（ジスモンダという名前でした）が庭に出て侍女たちと過ごしていたとき、誰の目にもとまらぬようこっそり娘の部屋へ行かれたのです。

しかし娘が楽しんでいるところを邪魔したくないと思いましたが、部屋の窓も閉まり寝室のカーテンも引かれていましたので、領主様はベッドの傍らに置かれたスツールに腰を下ろしました。そして、カーテンを体にかぶせて（意図的に体を隠したのですが）ベッドに頭をもたせかけているうちに眠ってしまわれました。領主様がこのように眠ってしまわれた、まさにその日に、（運悪く）ジスモンダはジスカルドに忍んで来るよう指示していたのです。ジスモンダは侍女たちを庭に残したまま忍び足でこっそりと部屋に入り、独りになるや扉をしっかりと閉めました。彼女はそこに人が潜んでいるとは予想もせず、待ちきれぬ思いで洞穴の扉を開けました。そこには、今か今かとじれながらジスカルドが待っていました。

二人はいつものようにベッドに倒れ込むや、逢瀬を楽しみました。そうこうしているうちに、領主様が目を覚まされ、娘とジスカルドが交わす言葉を耳にされ、その光景をご覧になりました。そ

の光景を目にするや領主様はとても悲しい、泣き叫びたい気持ちになりましたが、この場は声を立てずにじっと我慢し、時を見て恥辱のより少ない状況の下で内々に処分した方が良くだろうとお考えになりました。二人の恋人は領主様がそこに潜んでいるとはつゆ知らず、さらに続けていつものように素晴らしい時を過ごしたのです。

時間がきたのを知ると二人はベッドから下りました。ジスカルドは洞穴へ戻り、彼女は部屋から出ました。タンクレディ侯は（歳をとってはいましたが）やっとの思いで、誰からも見られたり気づかれたりすることなく、窓から庭へ出ました。王は物思いに沈む者のように、又、死に向かう者のように、足取りも重く自分の部屋へお戻りになりました。

夜の一時頃、ジスカルドは皮の上着を羽織って洞穴から出てきたところを領主様の命を受けて待ちかまえていた従者たちによって逮捕されました。そして二人の従者によって密かに領主様の所へ引っ立てられました。

王はジスカルドを見るなり、目にいっぱい涙を浮かべながら言いました。「ジスカルド、そなたが今日わしの屋敷でとんでもない罪を犯すのをこの目ではっきり見た。わしがこれまでそなたに抱いてきた慈愛と優しさの心をもってしても、そなたが犯した罪が罪であるだけに、わしの怒りの気持を抑えることも受けた恥辱を忘れることも到底できるものではない」。

ジスカルドは、やっとの思いで「愛は領主様や私自身よりはるかに偉大です」と答えられただけで、それ以上のことは何も言えませんでした。領主様はジスカルドを隣の部屋に閉じこめておこう命じられました。

翌日、王は（ジスモンダはこのことを知らなかった）考えあぐねていましたが、夕食後、いつもどおり娘の部屋へ行き、娘を自分の許へお呼びになり、ドアを閉め、悲しげな言い方で言いました。「ジスモンダ、わしはこれまでお前の徳と純潔に絶対的な信頼、信用を置いてきた。だから、（わしが正しい目でしっかり見ていないと忠告してくれた者もいたが）夫となるべき男は別と

してお前は他の男を近づけるような真似はもちろんしないだろう、又、そのようなことを考えることすらしないだろう、とずっと思ってきた。（この老齢の身に残されている）この命も、もう残りわずかだというのに、このように真に悲しい物思いに耽らざるを得ないというのは何とも情けないことだ。お前があのような不実な恋に走ることなく身分相応の男を得てくれていたならば、神もさぞお慶びになって下さったことであろう。しかし、お前は、こともあろうことか、ジスカルドという若者を選んだ。あの者は、宮殿に出入りする者の中でも、特に生まれも身分も低い、卑しい男で、（いわば神の御ために）子供の頃から今日に至るまでこの宮殿で育ててきてやった男だ。そのことを考えると、今回のことで、お前をどのように扱えばよいかかわからず、途方に暮れて心がひどく痛むのだ。あの男については、昨夜洞穴から出てくるところを捕らえさせて、今は囚人として牢に入れてある。そして彼をどう処分するかは、もう決めてある。だが、お前をどうするかは、未だ神のみぞ知るという状態なのだ。一方では、わしがお前に抱いている愛情は娘を愛するどの親よりも深いので、その気持から離れられないでいる。だが、もう一方では、お前が引き起こした馬鹿な行為がわしに与えた実に不快な気持や腹立たしさによって心が乱れるのだ。一方ではお前を許してやりたいという気持だが、もう一方ではわしの本心とは違ってお前を残忍に処したいという気持だ。だがしかし、わしが最終決断する前に、お前に弁護の機会を与えたいと思う」。

このように話すと、領主様はジスモンダの顔にキスをし、親に叩かれた子供のようにひどく涙を流されました。ジスモンダは父親の話を聞いたとき、もはや秘密の恋が露見しているばかりか恋人のジスカルドが捕まって投獄されていることがわかったので、量り知れないほどの悲しみに襲われるとともに、女性特有の恰好で悲しみをあらわにして、何度もわめき、叫びました。しかし、力強い勇気の方が気弱さを凌駕していました。それで、すでにジスカルドは死んでいるのではないかとの思いもあり、彼女は許しを乞おうと思わない

ばかりか、もはや生きながらえるようなことはするまいと決心したのです。そして、驚くほどの気丈さをもって大胆にこの事態に立ち向かおうとしたのです。

それで、彼女は、悲しみに沈む女性の顔つきでも過ちを犯した女性の顔つきでもなく、又、苦悩や当惑の顔つきでもなく、もうどうとでもなれと思っている人のごとくきつとした顔つきで、涙も見せず、しっかりした口調で言いました。「お父さま、私は否定するつもりも、へりくだってお慈悲を乞うつもりもありません。否定しても何ら役に立たないでしょうし、おすがりしても詮方ないことでしょう。ですから、お父さまの寛大さや愛情におすがりして寛大な慈悲深いお裁きをお願いするつもりはありません。そんなお願いをするのではなく、先ず、私は真実を申し上げ、こうなった理由や私の考えをはっきり申し上げて私の名誉を護りたいと思います。その後で、勇気という強い力によって潔く身を決したいと思います。私がジスカルドを愛したこと、又、今も愛していることに間違いはありません。そして私の命はもうそれ程長くないと思いますが、それでも命ある限り彼を愛し続けます。女は死んでもなお男の人を愛すると言います。それが本当なら、私は決して彼を愛することをやめないでしょう。このようなことになりましたのも、女の脆さや弱さからではなく、お父さまが私の結婚のことにあまり気を配って下さらなかったからですし、そんなときに日頃の行状の中でジスカルド様がお示しになった徳あるお姿に魅せられたからなのです。お父さまご自身も肉体からお生まれになったのですし、お父様の、その肉体から私はあなたの娘として生を受けたのです。決して石や鉄から生まれたのではないということ、親愛なお父さまにはわかって欲しいと思います。さらに申し上げれば、(お父さまはもう相当歳を召されてしまわれたとはいえ)若者がどのようなもので、若者の本能がどれ程強いものであるかということ、を絶対お忘れにならないでいただきたいです。お父さまは(若い頃)騎士の修練に励まれ、さぞ精力がみなぎっていたことでしょう。でも、歳をとって静かな余生をゆった

りとお過ごしの今でも、若い頃と同じような、どんなに大きな精力がお体にみなぎっているかをお考えになるべきです。だからこそお父さまがお生まれになったと同様に私も肉体から生まれることができたのです。私はまだ齢もあまり重ねておらず、まだ若いので、性欲や快楽を求める力が体中に満ち溢れています。結婚で体験したことが頭にのぼって、私は欲望を達成したい気持にかき立てられるのです。そしてそうしたいという欲望が大きくなるとなると湧いてきたとき、私には抗する術もなく、ただ欲望の導くにまかせるより仕方がないのです。確かに今の私は若い女のように恋多き女です。でも、私、そういう女が好きですわ。でも、私は恋の道を走りながらも、罪の意識に従って、可能な限りお父さまにも私自身にも恥となるようなことがないように全力を尽くしてきたつもりです。そのことに対して、哀れみ深い愛の神さまも心優しい運命の女神さまも、密かに恋が成就する方法を見出してお示し下さいました。その結果、私は誰にも知られることなく、この身の欲望を果たすこととなったのです。そのことを否定するつもりはありません。でも、(どなたの告げ口でお父さまがお知りになったのか、それとも、何か別の方法でお知りになったのかは存じませんが)私は多くの女たちとは違って、偶然の馴れ初めでジスカルドさまを選んだではありません。誰にもまして長い時間をかけて忠告や助言を得ながら熟考の末選んだのです。その結果私はあの方の心をしっかり掴んだのです。そして、二人の関係が長く続くよう賢明に振る舞って、逢瀬を楽しみながら欲望を満たしたというわけです。「純粹に」愛して振る舞ってきたというのに、それがお父さまのお気持を損ねたなどとは思ってもやらぬこと！ お父様は、真実をお取り上げにならず、下賤なお考えの方をお取りになって、「紳士を選んでおりさえすればこんな怒りにはふれなかったものを」などとおっしゃって、私をこのようにひどく懲らしめようとなさっているのです。その上、過ちは私にあるのではなく運命の女神さまにあるのだとはお考えにならないのです。運命の女神さまの方にこそ罪があるというものです。だ

って、女神さまは多くの場合、まったく価値のないものを高く持ち上げられて、もっとも価値のあるものを蹴落とされるのですもの。でも、このようなことはもうこれくらいにしましょう。大本のところが肝心なのですからね。いいですかお父さま。まず第一に申し上げたいのは、私たちは皆、肉の集合体からそれぞれが肉を受け継いできたのだということです。創造主たる神はすべての人に等しい力をお与えになり、同じ徳目を備えた者としてお造りになりました。でも、その徳目が、等しく生まれてきたすべての者にも、これから等しく生まれてくるすべての者にも、差別や区別を引き起こす原因となったのです。そしてもっとも高い徳目を身につけた者や身分の高い者がすべきことをした者が高貴な人間で、残りの者はすべて下賤の輩だと言われてきたのです。今ではこれとは違う考え方をする人もいますので、この法則も曖昧になってはきましたが、それでも、今なお、女は女としての資質やたしなみの良さを持つべきだとされているのです。男の場合も同様で、高い徳目をもって振る舞えば、その男は間違いなく高貴な男と言われるのです。徳に外れた振る舞いをすれば、その男は過ちを犯していると断じられ、決して高貴な男とは呼ばれないのです。紳士と言われる方すべてをとくとご覧になって、その方々の徳目の表し方や行動のとり方をしっかりお調べになって下さい。その上で、ジスカルドさまの素養や性格をよくお調べください。えこひいきなしでご判断下されば、ジスカルドさまこそ真に高貴な方で、他の紳士などは彼に比べれば農奴同然だとおわかりいただけますわ。お父さま、あの方の徳の高さや卓越さはお父さまのお心や私の目では量られないほど、他の誰よりも秀でていらっしゃるのです。お父さまほど人をお褒めになる領主様や、さらに称賛すべき者には褒賞までお授けになる領主様はどこにもいらっしゃらないと思います。でも、正直者が称賛されなければならないと思うのですよ。こう申し上げるのも、理由があったのです。お父さまはあの方をお褒め下さったことは一度もありませんね。でも、私にはよくわかっていることですが、あの方はお父さまの想

像以上に真っ正直なお方なのです。私の目に狂いがあったとしても、それは私がお父さまを見る目の方にこそ狂いがあったということですね。それでもお父さまは私が卑しい者と一緒になろうとしているとおっしゃるのですか。よもや、そうはおっしゃらないでしょうね。でも、万が一「卑しい男と」などとおっしゃるのでしたら、仕方がありません。そのときには、そのとおりだと認めることにいたしましょう。でも、正直者の家来を高く評価なさらないなら、それこそ本当にお父さまの恥でございますよ。富を得て気高さを失う人もいますが、貧乏になったからといって、その人の気高さにひびが入ってしまうわけではないのです。多くの王様や偉大な大公さまも昔は貧しかったのですし、逆に昔貧しかった多くの百姓や羊飼いが今は金持ちになっているのはごく普通のことです。

さて、今お父さまをもっとも困らせている点は、こんな私をどう始末すればよいかということでしょう。そのようなお悩みなど勇気を奮ってお捨てになって下さい。でも、若い頃には決してなさらなかったことを、このようなお歳になってから敢えてなさろうとするのならば、私にもそれ相応にいつでも残忍になる覚悟ができています。ですから、どんな残忍な仕打ちで私を罰して下さいでも結構です。でも、過ちを犯したとどんなに指弾されても仕方ありませんが、お父さまの仕打ちを避けるために罪を認めてお許しを乞おうとは思いません。お父さまがジスカルドさまになされたこと、あるいはこれからなさろうとしていることを私にはなさらないというのならば、私は自分のこの手で実行します。その時には、どうぞ涙に暮れて、女たちと一緒に涙をお流し下さい。あるいは私たちにはこれ以外の道はないとお考えになって、残忍な道をお選びになるというのであれば、彼を殺して下さい。そして、彼を殺すために使ったそのカップを私に飲み干させて下さい」。

王様は娘の気丈な言葉を聞いたとき、まさか言葉どおりになるとは、つまり、やると言ったとおりのことを娘がほんとうに実行するとは思えかけないことでした。それで、娘にはいかなる危害

をも加えたくないと思っていましたので、娘から別れた後、燃える娘の恋情を鎮めるにはジスカルドを破滅させ、殺害するしか道はないと心に決められたのです。

それ故に娘がその場を立ち去るや、王様は、(捕らえたジスカルドを監視していた)二人の召使いをお呼びになり、次の夜誰にも気づかれぬよう音を立てずにジスカルドを窒息死させ、体から心臓をえぐり出して持ってくるよう命じました。それで二人は命じられたとおりに実行しました。

翌日、王様は美しい黄金のカップを持ってこさせ、その中にジスカルドの心臓を入れ、(もっとも信頼を寄せていた召使いの一人に命じて)娘のところを持っていかせました。そのとき王様は「これは父からの贈り物で、そなたがもっとも大切に、いつも慰めを得ていたときのように、これでそなたの心を慰めて欲しいと願っての贈り物だ」と娘にカップを手渡すとき伝えるよう命じられました。

一方、ジスモンダは残忍な死をも辞さないという決意からひるむことなく、(父親が立ち去った後で)猛毒のハーブや根を持ってこさせ、それらを混ぜて蒸留し、懸念する事態が起きたならば、すぐ飲みほそうと思って毒薬を作っていました。

国王の命を受けた召使いはジスモンダの所へ来て国王からの贈り物を手渡ししながら、命じられたとおりの口上を述べました。ジスモンダはききとした顔つきで贈り物のカップを受け取りました。そして、心臓を見るや、それが間違いなくジスカルドの心臓だとわかるとともに、父親からの口上の意味がわかり、ジスモンダはカップを手で覆いながら召使いを見据えて言いました。「確かに、お父さまがとて賢明になされたように、このような心臓は黄金の墓に入ってくださいことこそ相応しいですね」。

そう言うとき、ジスモンダはカップを口元まで持ち上げ、口づけをして言いました。「お父さまはあらゆる点で優しい愛情をずっと私に注いで下さいました。でも、(もう私の命が終わろうとしている)この時になって初めて、今まで思ってきた

よりはるかに大きな愛情なのだということがわかりましたわ。私のためにこれ程素晴らしい贈り物を下されたことに対して最後のお礼を申し上げたいと娘が言っていたと、お父さまにお伝え下さい」。

そう言うとき彼女はカップに体を向け、それをしっかりと胸に抱き、心臓を眺めながら言いました。「ああ、我が喜びの甘美な港、そんなあなたを、ああ、今このように、この目で眺めることになろうとは。残忍なお父さまを呪います。知識ある者、思慮ある者の中でも、あなたに会えたことで、一時いつときがもう喜びそのものでした。そのあなたはもう一生を終えられたのですね。運命の女神さまがあなたにお与えになった人生の終焉によって、あなたは召されて、人は皆戻るといふあの河岸の地へ行ってしまうたのですね。あなたはこの世の悲しみや苦痛をお捨てになり、あなた様に相応しいお墓、それも敵が用意したお墓を得られました。あなたの葬儀を完成させるのに必要なものは、あなたが生きてこられた日々の中であなたがもっとも愛した女性の涙しかありません。そして、神様はあなたにその涙を受け取っていただけるようにとお考えになり、無慈悲な私の父の頭の中にあなたを私のもとに送ろうという残忍な気持をお入れになったのです。ですから、もうこれ以上涙を流さず、何も恐れることなく、気丈に死のうと決心している私ですが、その前にどうかあなたに少し涙を流させて下さい。そして、枯れるまであなたに涙を流しましたら、あなたがこれまでずっと大切に下さったこの魂をあなたにご一緒させます。あなたの魂にご一緒しなければ、見知らぬ土地で安全な旅が満足にできる筈がありませんもの。確かに私の魂は今もここ、この肉体に宿っています。この肉体に崇敬の念を寄せながらここに宿っています。このことは、間違いなく、私の望みでも、お父さまの望みでもあるのです。(私の魂は今でもお父さまが私を愛して下さいっていると信じているのですよ)。お父さまはいつも私のためを思って下さっているのですし、事実私もお父さまをとて愛しているのです」。

彼女はこのような言うと、夥しい涙（あたかも彼女の頭の中に泉があるかのようでした）を流しました。たびたび死んだ心臓に口づけをしては涙を流す、その様は驚愕そのものでした。彼女のまわりにいた侍女たちにはそれが何の心臓か、又、彼女の言葉が何に向けられたものかわかりませんでした。彼らは皆同情のあまり一緒になって泣き崩れました。そして、（無駄ではありましたが）侍女たちは皆、悲嘆の原因を教えるに欲しかったと、泣きながら頼みました。そして力の限りジスモンダを慰めました。

涙を十分流した後で彼女は顔を上げ、涙を拭いて言いました。「ああ、愛する私の心臓、私があるにすべきことがすべて終わった今はもう、この魂を明け渡してあなたの魂のお供をする以外、何も残されていません」。

彼女はそう言う、前日に作っておいた毒水の入ったグラスを持ってこさせ、心臓の入ったカップに注ぎました。その心臓は流された涙ですっかり濡れていました。そしてカップを口にあげてや、彼女は何のためらいもなく毒水を一気に飲み干しました。そうするや、彼女は手にカップを持ったままベッドへ行き、亡き友の心臓を自分の心臓の上近くにしっかり抱いて、できる限りそっとベッドに身を横たえました。

これを見た召使いたちは（彼女が飲んだ水がどのような水か知りませんでした）王様に知らせました。国王は何が起ったか気がかりで、すぐさま娘の部屋へ下りて来ました。国王は彼女がベッドに身を投げたその瞬間にそこへ到着したかと思えるほどすぐさま駆けつけたのですが、もう彼女を助ける術がないほど遅すぎたとわかるや（激痛の中で喘ぐ娘の姿を見て）優しい言葉を投げかけながら、そこに泣き崩れました。

その王に向かって彼女は言いました。「お父さま、私が望みもしない、そんな涙はどこかにしまっておいて、この体の上に流さないで下さい。私はそんな涙など欲しくありません。自分の頑固さの結果をみて嘆くなんて、お父様らしくないですわ。でも、あなたがいつも私に抱いて下さった、あの愛のお心が今も残っているのですしたら、どう

か最後にこの願いを聞き届けて下さい。私がジスカルドさまとひっそり生きることを叶えて下さいませんでしたが、せめて亡骸だけでも、どうか誰にもわかる所に一緒に葬って下さい」。しかし、国王は苦しみや悲しみで涙にくれるばかりで、一言も声をあげることができませんでした。

ジスモンダは最後に近づいたのを知るや、ジスカルドの心臓を自分の胸にしっかり抱いて、その心臓に呼びかけて言いました。「さようなら。神に召された愛しの心臓、私は今、あなたの許へまいります」。そう言うや、彼女は目を閉じ、次第に感覚をなくしながら悲しみに満ちた人生を終え、旅立って行きました。

お聞きいただいたように、ジスモンダとジスカルドの愛は、かくして悲しみのうちに終わりました。国王はその二人にたっぷりと涙を流し、悔いても遅すぎた自分の残忍さにやっと目が覚めて、二人を懇ろに葬られ、一つの墓に入れられました。サレルノの人々がこぞって大きな悲しみに包まれたことは申すまでもありません。

訳者註

- 1) ナポリの南にあった小国。ポローニヤ大学と並ぶヨーロッパ最古のサレルノ大学を持った。サレルノ大学は特に13～14世紀に医学系の単科大学として名を馳せた。
- 2) ナポリの北にあった小国。

訳者あとがき

これはウイリアム・ペインター（1540?–1594）の『悦楽の宮殿』(*The Palace of Pleasure*)に収められている39番目の物語（「タンクレディ侯爵」）の日本語訳である。訳に使用したテキストはWilliam Painter, *The Palace of Pleasure with an introduction by Hamish Miles and illustrations by Douglas Percy Bliss* (The Cresset Press, London, MCMXXIX) (4巻本)である。このテキストはオックスフォード大学印刷局で機械漉きの紙に500部、手漉きの紙に30部が印刷された。私の手許にあるテキストには第139冊目と記されている。

ウイリアム・ペインターは生涯に101編の歴史

と物語を集めた。そのうち38編は史書から集められたものであったが、残りの68編はイタリア、フランス、スペインの「ノヴェラ」(Novella)という新しい文芸様式による物語から集められたものであった。これらの物語の中にボッカチオ(Giovanni Boccaccio; 1313-1375)の『デカメロン』(Decameron; 1350?-1353)が含まれていた。

ウィリアム・ペインターは全2巻本として『悦楽の宮殿』(*The Palace of Pleasure*)を編纂した。彼は『デカメロン』から得た15編の物語のうち、10編を第1巻に、5編を第2巻に収めた。(4巻本として編集・刊行されたマイルズ Hamish Milesの版では、10編が30番から39番の物語として第1巻に、又、残りの5編が第2巻に収められている)。

「タンクレディ侯爵」は『デカメロン』で4日目、第1番の物語(Tale iv, 1)として収められている物語であるが、ウィリアム・ペインターは第39番目の物語として採用して第1巻(マイルズ

の版でも第1巻)に収めた。

『悦楽の宮殿』所収のいずれの物語にも段落がない。「タンクレディ侯爵」もその例外ではない。しかし、この日本語訳では読者の便を考慮して段落をつけた。又、「タンクレディ侯爵」は、他の物語同様、「語り」の形を取っている。そのため、語句の繰り返しが多いばかりか、関係詞や句読点の連続で一つの文が非常に長い。原文の味を損なわないよう心がけるとともに、日本語に馴染まない語句の繰り返しや違和感のある長文は避けるように心がけたが、不自然な繰り返しや長文があるかもしれない。原著の「語り」を念頭にお読みいただければ幸いである。

「タンクレディ侯爵」は近世英語で書かれている。綴り、語義とも現代英語とは異なる。綴りの異同はほぼすべての単語に及ぶため、それをここに記述することは量的に不可能であるが、語義については本稿の後に語義表をつけた。

A Lexical Word List for ‘The Thirty-Eighth Novell’ (‘Tancredi’)
of William Painter’s *The Palace of Pleasure* with an Introduction
by Hamish Miles and Illustrations by Douglas Percy Bliss
(The Cresset Press, London, MCMXXIX)

Masami Hatano

page	line(s)	words in text	listings in OED	meaning
145	5	Salerne	Salerne, <i>Obs.</i>	Anglicized f. L. <i>Salernum</i> , It. <i>Salerno</i> , the name of an Italian maritime town near Naples, used attrib. = <u>Salernitan</u> a. 1598, 1607, 1635の3例のみ。
	6	imbrued	imbrue	To stain, dye (one’s hand, sword, etc.) <i>in</i> or <i>with</i> (blood, slaughter, etc.).
	8	but	but	By the omission of the negative accompanying the preceding verb (see 4 a), <i>but</i> passes into the adverbial sense of: Nought but, no more than, only, merely. (Thus the earlier ‘he nis but a child’ is now ‘he is but a child’; here north. dialects use <u>nobbut</u> = nought but, not but, ‘he is nobbut a child’.)
	16	be lustie	lusty	Apparently a typographical error for ‘he’ Of persons and their attributes: Joyful, merry, jocund; cheerful, lively. <i>Obs.</i>
	19	care	care	Mental suffering, sorrow, grief, trouble. <i>Obs.</i>
	20	require	require	To ask for (something) as a favour; to beg, entreat, or request (†of one). Now <i>rare</i> .
	34	use use himself	use	<i>refl.</i> To conduct or comport (oneself). †Also, to resort or repair (cf. sense 23). Freq. from c 1530 to c 1590
146	2	sporting	sporting	Sportive; playful. <i>Obs. rare</i> .
	3	bellows a pair of bellows		An instrument or machine of this kind used to blow a fire; it may be portable, as the common hand-bellows, or fixed, as a smith’s bellows. Often, with reference to the two halves or handles, called a <i>pair of bellows</i> , rarely, as sing., <i>a bellows</i> .
	7	perused tenour	peruse tenor	To survey, inspect, examine, or consider in detail. <i>arch.</i> The course of meaning which holds on or continues through something written or spoken; the general sense or meaning of a document, speech, etc.;
	9–10	appointed	appoint	To determine authoritatively, prescribe, fix (a time, later a place) for any act.
	12	force of force	force	of (or on) force: of necessity, on compulsion, whether one will or no, unavoidably, necessarily, perforce. (Cf. perforce, †afforce.) Also, of fine force (see fine a. 3), of very force. <i>Obs.</i>
	14	payre payre of stayers	pair pair of stairs	a flight of stairs
	18	amorous	amorous	Of persons: Inclined to love; habitually fond of the opposite sex.

page	line(s)	words in text	listings in OED	meaning
	23	degrees	degree	<i>transf.</i> Something resembling a step; each of a series of things placed one above another like steps; row, tier, shelf, etc.
	28	taried	tarry	To linger in expectation of a person or occurrence, or until something is done or happens; to wait.
		faining	feign	With <i>refl. pron.</i> as obj. followed by simple complement, † <i>as</i> , or <i>to be</i> : To make oneself appear, put on an appearance of being. †Formerly in wider use, with the refl. obj. followed by <i>inf.</i> , <i>that</i> , <i>as that</i> .
		faining her self		
	31	one with an other	one one with another	(also <i>one and another</i>), Together (<i>obs.</i> or <i>arch.</i>).
147	11	wonte	wont	Accustomed, used <i>to</i> , familiar <i>with</i> (a thing, practice, or condition). <i>Obs.</i> (a) Conjugated with the verb ‘to be’, and const. <i>inf.</i> (with or less freq. without <i>to</i>): Accustomed, used; in the habit of (doing something).
	15	solace to the intent	solace intent	To cheer, comfort, console; †to entertain or recreate. In phrases, <i>as to what intent</i> , <i>to that intent</i> , <i>for this intent</i> , etc. Esp. in the conjunctive phrase <i>to (†for) the intent (that)</i> : to the end (that), in order (that). <i>Obs.</i>
	16	privelie Now <i>arch.</i> or <i>literary.</i>	privily	In a privy manner; not openly or publicly; secretly, privately; stealthily; craftily.
	37	affiaunce	affiance	The action of confiding, or fact of having faith, in a person, quality, etc.; faith, trust.
	42	indureth	endure	To last, continue in existence.
	43	conteyne	contain	To restrain, hold in, keep in check; to hold back, keep back, hinder (<i>from</i> an action, etc.) <i>Obs.</i>
148	5	sore	sore	With verbs of grieving, annoying, etc.: So as to cause mental pain or irritation; deeply, intensely.
	6	take ... at thy handes	hand	<i>at the hand(s) of</i> : from the hands of; from. (Expressing the immediate source, after such verbs as <i>receive</i> , <i>take</i> , <i>find</i> , <i>seek</i> , <i>require</i> , etc. See <i>at prep.</i> 11.)
	10	displeasure	displeasure	The opposite of pleasure; discomfort, uneasiness, unhappiness; grief, sorrow, trouble. <i>Obs.</i>
	11	mocion	motion	The action of moving, prompting, or urging (a person to do something, or that something be done); a proposal, suggestion (esp. in phr. <i>to make a motion</i>); an instigation, prompting, or bidding. <i>Obs.</i>
	19	schrechus Obs. form of <u>shriek</u>	shriek	An act of shrieking; a shrill, piercing, or wild cry expressive of terror or pain.
		howe beit	howbeit	<i>conj.</i> or <i>conjunctive adv.</i> (orig. with <i>that</i> , which was the actual conjunctive element). Though, although. <i>Obs.</i>
	21	stoutnesse	stoutness	Bravery, valour, courageousness. Now <i>rare</i> , exc. in <i>stoutness of heart</i> .
		sute made any sute	suit	<i>to make (one's) suit</i> : to supplicate, petition; to sue to a person for a thing; also const. <i>inf.</i> , to petition for something to be done. <i>Obs.</i>
	24	drie	dry	Not accompanied with tears.
	29	bontiful	bountiful	Of persons: Full of, or abounding in, bounty; graciously liberal, generous.

page	line(s)	words in text	listings in OED	meaning
	31	effectes	effect	Something which is attained or acquired by an action. <i>Obs.</i> 1602 <i>Shakes. Ham.</i> iii. iii. 54, I am still possest Of those effects for which I did the Murther. (1例のみ)
	33	if so be that ...	if	<i>if so be (that)</i> , if it happen that, supposing that: a somewhat rhetorical equivalent of simple 'if'. <i>arch.</i> and <i>dial.</i>
	37	engendred	engender	Of the male parent: To beget.
	38	in likewyse	likewise	(The full phrase.) in like wise: in the same manner. <i>Obs.</i>
	41	youthlie	youthly	Pertaining to or characteristic of youth: = <u>youthful</u> 2.
	42	puissaunce	puissance, Now <i>arch.</i>	Power, strength, force, might; influence.
149	43	delicate	delicate	Self-indulgent, loving ease, indolent. <i>Obs.</i>
	19	comptroll	control	To take to task, call to account, rebuke, reprove (a person). <i>Const. of, for. Obs.</i>
	29	her	† her, here, n. poetic. <i>Obs.</i>	Lord, chief, master; man of high position or rank; sometimes more generally = Man.
	34	terme	term	To express in particular terms, or in a specified form of words; to phrase. (Usually with <i>as.</i>) <i>Obs.</i>
	37	affection	affection	Biased feeling, partiality. <i>Obs.</i>
150	40	wight	wight	A human being, man or woman, person. Now <i>arch.</i> or <i>dial.</i>
	3	couple	couple	To join in wedlock or sexual union. <i>Obs.</i>
	4	condicion	condition	A particular mode of being of a person or thing; state of being.
	5	verely	verily, Now <i>arch.</i> or <i>rhet.</i>	In truth or verity; as a matter of truth or fact; in deed, fact, or reality; really, truly.
	6	vouchsafed	vouchsafe	To show a gracious readiness or willingness, to grant readily, to condescend or deign, to do something:
	10	doubt	doubt	A matter or point involved in uncertainty; a doubtful question; a difficulty. <i>Obs.</i>
	33	amoved	amoved, <i>obs.</i>	Stirred, aroused, excited.
	36	came to passa	come	<i>to come to pass</i> : to happen, take place in the course of events, come about, occur, be fulfilled.
151		doubted	doubt	To dread, fear, be afraid of.
	7	harboroughe	harbourough	ME. forms of <u>harbour</u> <i>n.</i> and <i>v.</i>
	9	hower	hower (e	<i>obs.</i> forms of <u>hour</u>
	11	vouchsafed	vouchsafe	To show a gracious readiness or willingness, to grant readily, to condescend or deign, to do something:
	12	recourse	recourse	A running, coming, or flowing back, a return (in <i>lit.</i> or <i>fig.</i> uses), reflux; also, opportunity or passage to return. <i>Obs.</i>
		traveyles	travail	Bodily or mental labour or toil, especially of a painful or oppressive nature; exertion; trouble; hardship; suffering. <i>arch.</i>
	13	sepulture	sepulture	A burial-place, grave, tomb: = <u>sepulchre</u> <i>n.</i> 1. Now only <i>arch.</i>
	16	wherof	whereof, Now formal or <i>arch.</i>	Of which, in <i>objective</i> senses (<u>of</u> X).
	17	bestow	bestow	To place, locate; to put in a position or situation, dispose of (in some place). <i>arch.</i>
	22	safeguard in better safegard	safe-guard	<i>in safeguard</i> , in safety or security. <i>Obs.</i>

page	line(s)	words in text	listings in OED	meaning
	31	plaintes	plaint	The action or an act of plaining; audible expression of sorrow; lamentation, grieving. (From 1600 chiefly <i>poetic</i> .)
	35	ghost	ghost	The soul or spirit, as the principle of life; also <i>ghost of life</i> . <i>Obs.</i>
	37	bained	bain, <i>Obs.</i>	To bathe or wash; to drench.
	43	incontinently	incontinently, <i>arch.</i>	Straightway, at once, immediately; = <u>incontinent</u> <i>adv.</i>
152	4–5	bestowe	bestow	To place, locate; to put in a position or situation, dispose of (in some place). <i>arch.</i>
	6	Howe be it	howbeit	However it may be; be that as it may; nevertheless; however. <i>arch.</i>
	12	cleped	clepe, <i>Obs.</i> (or <i>arch.</i>)	To call upon or to, speak to, address. <i>Obs.</i>
		strained	strain	To clasp tightly in one's arms. <i>Obs.</i> b. esp. <i>to strain (a person) to one's bosom, heart, and the like.</i>
	14	therewithall	therewithal, <i>arch.</i>	That being said or done; = <u>therewith</u> 2 c.
	17	fill	fill	A quantity sufficient to fill a receptacle or empty space; a filling, charge. <i>lit.</i> and <i>fig.</i>